

〔研究ノート〕

看護・医療系学生の共同制作における、 チームコミュニケーション向上のためのアート教育

大 溝 文 清¹⁾

要 旨

創造的アート教育の創出は、ベンチャービジネス立ち上げの手法と類似している。魅力ある授業を提供するには、明確な教育目標の設定と、使用題材への多角的アプローチによる多面的で重層化された教材の開発が必要である。多様な学生の要求には、従来の授業手法を越えるためにはアクティブ・ラーニングの手法を導入したアート教育が有効と考えられる。アート教育は、想像力と自己の可能性を追求する能力の育成であり、この目標達成には常に授業の再構築と教材の精選化・系統化ならびに実現可能な工程表作成が必要不可欠な要素である。

本実践では共同制作による課題を学生相互のコミュニケーションをツールに完成させることで、その効果を検証した。実践後のアンケートでは、共同制作における自己存在の確認と表現意欲や満足度と共に連帯感が醸成され、アクティブ・ラーニングの導入は有効であり、アート教育は生活のQOL向上に密接に関連する教育であることが判明した。

キーワード：共同制作、アート教育、アクティブ・ラーニング、コミュニケーション

I. はじめに

課題「共同制作」の導入は平成16年から始まる。担当学年は国家資格取得を目指す年齢構成・出身地・学歴が異なる学生で構成されたクラスで、学生同士の精神的親和性に欠ける学年であった。そこで、授業を通して学生相互の関係改善を図る目的で、共同制作を導入することとした。アート教育では、体験による知識と技術の獲得により、問題解決の諸条件を取捨選択しながら完成に至る。一作品を全員で完成させる共同制作では、他者との関係を調整しつつ、相互のコミュニケーションを図ることにより問題解決を図る必要がある。作品完成のための共通の基礎知識と対象物を観察し正確に表現する能力の取得のための課題を中心に授業を構築した。当初の課題は原画を等分割・個人毎に割当部分を拡大・制作、完成後張り合わせて一画面とした。完成作品は表現能力と技法の不統一により、素材の異なるモチーフを寄せ集めたパッチワーク的作品となった。しかし、授業後のアンケートでは全員で一作品を完成させたことで、学生相互

の関係改善に一定の評価が得られたことが示された。この手法により、平成16・17年度は「ラルースの解剖図」(喉頭矢状断カラー全2図)。18年度は青森県立美術館開館記念に同館所蔵の、アレコの背景画「サントペテルブルグの幻想」(カラー1図)。19年度はポッティチェリの「ビーナス誕生」(カラー1図)。20年度はラファエロの「小椅子の聖母」(モノクローム1図)を制作させた。各授業後のアンケートでは、作品完成により一応の達成感と喜びは得られると判明したが、より完成度・統一感・満足度の得られる課題として、新たな視点を持つ課題を模索し本実践へと移行した。

II. 授業実践について

1. アート教育の目的と必要性について

アート教育は、作品制作を通して、想像力の伸張と自己の可能性を追求する能力を養うことにある。また、内から湧き出る根源的な創造の喜びを体験させ、生活を豊かにできる能力の涵養を目標としている。この実践で

1) 弘前医療福祉大学短期大学部 生活福祉学科 介護福祉専攻 (〒036-8102 青森県弘前市小比内3-18-1)

は、諸問題が有機的な関連の中で存在することを体験を通して知り、解決させることで、結果の予測や知識が問題解決能力として獲得できると考えている。体験により獲得した知識と柔軟な思考は、日常生活を豊かに変換する能力として、生活のQOL向上に大きく寄与し、人間を更なる高みへと踏み出させる原動力となる。

しかし、生活に欠かせないアート教育の現状は、青森県の公立高等学校の美術科教員配置数の推移にその一典型が見られる。平成5年度、青森県公立高等学校69校の美術の専任教師の配置数は、28名であった。平成21年度は13人（平成21年度青森県高等学校教育研究会「美術工芸部会」調べ）と40.6%から18.8%へと減少した。高校の現場では、美術科目の未開講や複数校担当の非常勤講師で対応することとした。学習指導要領では「自分の興味に応じて芸術科目を自由に選択できる」と掲げられているが、芸術科目を自由に選択し、個性豊かな自己表現の場が閉ざされることとなった。今日の教育が抱える諸問題解決には、人間としてのアイデンティティーの再確立が必要とされているが、今こそ芸術教育における情操の陶冶の重要性に再着目する必要がある。

「美術と生活」の共同制作による造形表現活動では、人間同士の関わりや連帯感・達成感や充実感が自己体験を通して獲得され、小さな体験と大きな感動を将来の生活に活用できる有効な教科であることを認識させたことにある。共同制作による授業では、相互の個性の尊重と受容により、個性に応じた表現活動を互いに認知し合う意識の構築から始まる。心豊かな生活に必要な要素とは何か、アート教育がその一端を担っている。

2. 「美術と生活」の選択生の現状について

青森県の公立高等学校の美術教員の配置数とその推移を前述したが、「美術と生活」を選択した学生が高等学校で「美術」を選択した割合は、平成21年度・21.1%、平成22年度・35.1%、平均・31.0%である。実に2/3の学生が中学校卒業以来の学習となる。したがって、「美術と生活」選択生には高い表現技法は望まず、平易な技法を中心とした授業の構築を目指した。特に美術に興味を持つ選択生の関心に応えるために、アクティブ・ラーニングの手法を導入し、課題を取り巻く日常生活に関連する知識を折り込み、美術が単なる表現学習を越える授業となるよう展開することとした。創造の楽しさを多角的な視点からアプローチすることで、生活を構成する諸要素がより興味深い対象となることを意識させた。

3. アクティブ・ラーニングを導入したアート教育について

アートの基礎知識を将来に活用できる能力とするには、個人毎の技法修得はもちろんであるが、仲間と共に

表現の楽しさや充実感を共有することで、従来の学習とは異なる表現の可能性を学べる題材として「共同制作」を取り上げた。

現在さまざまな教科に、アクティブ・ラーニングが導入されている。この学習は「能動的な学習」と呼ばれ、授業者が一方的に知識を伝達する授業ではなく、課題研究やPBL、ディスカッション、プレゼンテーションなど、学生が能動的に活動できる学習をいう。本学の前身である専門学校時代から、この手法と近似した授業を実践してきた。本実践では、アート教育でのアクティブ・ラーニングを導入することで、題材の構成を多角化と多層化した総合学習として位置付けることができた。中・高等学校の美術の授業では、時間的な制約から限られた数の分野を表面的になぞる程度の授業で終始せざるを得なかったが、幸い本学では、「美術と生活」にアクティブ・ラーニングを導入することで題材の重層化が図られ、日常の朝の目覚めから、食事・衣服の選択等々視覚を通して行われる全ての行動と連動し、そのQOL向上に関連する総合学習として位置を確保できた。

Ⅲ. 研究目的

「美術と生活」では、授業の前半部分にアート教育の基本的目標である表現の楽しさと表現による自己実現を目指す題材を設定して、後半の課題へと誘導した。本実践では、青森県出身の「棟方志功」を題材に、アートと生活を接点に作家と時代背景、仏像の知識、文化財の保護やその現状、著作権保護法、生活とJIS、表現技法を支える生活の基礎知識等を題材に取り上げた。アート教育は生活の広範な領域と密接に関係すること理解させ、題材を通して総合学習であることを認識させると共に、生活に活用しそのQOL向上に寄与する能力の育成を意識させることを目標とした。

本実践での版画作品を、原画とは異なる「ステンシル技法」で拡大再現させる課題は、我が国初の試みであると推察している。制作にあたり表現技法の統一と共同で一作品を完成させるには、造形的知識の共有と相互の能力の比較と受容を図りつつ、相互コミュニケーションを通して行われなければならない作業である。学生が将来目指す医療・看護の職場で、最も必要とされるコミュニケーション能力の重要性を意識させることを重点目標に、ここではコミュニケーションの中から、自然発生的にリーダーシップの意識を引き出すことにより、チームの構成員として自己存在の確立や役割を体験できることを検証することとした。

1. 課題と使用教材について

弘前医療福祉大学「美術と生活」(1学年後期・選択科目・2単位90分×15コマ)では、前半の7/15を基礎技法や生活を支える基礎知識にあて、後半の8/15で「二菩薩釈迦十大弟子」(全12図)を共同制作で拡大制作することとした。チーム編成はくじ引きで実施、各チームが原図(A3版)を400%に拡大し、版画の表現に近いステンシル技法で制作することとした。版画での再現は、物理的な空間・材料・道具の調達、著作権等々のため、当初から考慮しなかった。作品は、平成21・22・23年

度の3カ年計画で完成を目指した。初年度の平成21年度は21名の選択生で、全12作品中3作品(1作品は教材提示用として制作)を完成。平成22年度は選択生増加(39名)により、残部の8作品を完成させ、当初の計画より早く2カ年で全12作品を完成させた。共同制作のようなグループで計画的に実践するには、学生相互のコミュニケーションが不可欠である。このために意図的にチームリーダーを選出せず、自然発生的にリーダーが出現するよう授業を設計した。学生相互で何をなすべきか、考えさせ実行させることを意図したからである。

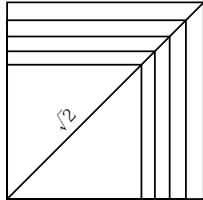
図1 ■「図法・製図」・・・共同制作のために・・・ 大溝文清

◎拡大について、図法・ $\sqrt{2}$ 矩形・黄金分割等

1. 拡大について・・・与えられたブロックをなるべく細かく分割することにより、より正確なトレースが可能になります。

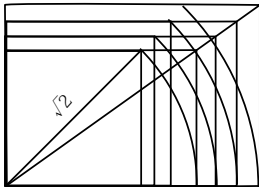
相似形の形成

- 1). 正方形

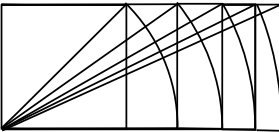


- 2). $\sqrt{2}$ 矩形

$\sqrt{2}$ 矩形は紙の規格A列・B列に採用されています。

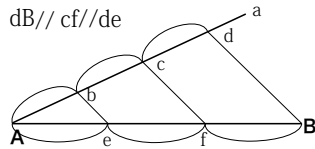


- 3). 黄金分割等



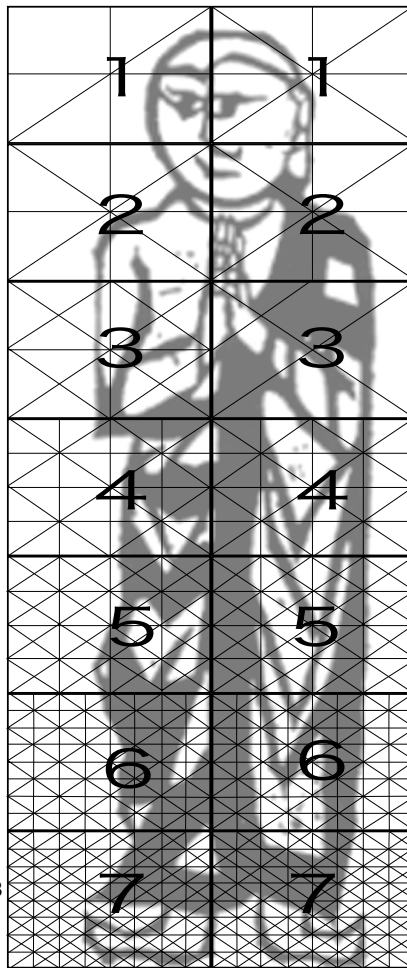
- 1). 直線 AB を等分割する
- 2). 等分割について

$dB // cf // de$



- ・Aを頂点として直線aを引く。
- ・Aから任意の長さで $Ab=bc=cd$ の点を決める。
- ・dとBを結びdBと平行に $c \cdot b$ を基点に線を引く。
- ・ABは任意に等分割できる。

各チーム分担例(1チーム7人)



H 2040×W630

3. 拡大・縮小について
- 限りなく、対角線・二等分線(タテ・ヨコ)で分割し、座標を求める。

原稿)

2. 平成22年度は(1)の8作品を教材とし、(2)以下の条件を付し、表1のように授業を実践した。

- (1) 共同制作原画棟方志功「二菩薩釈迦十大弟子」¹⁾ 目鍵連の柵、優婆離の柵、舍利弗の柵、摩訶迦葉の柵、羅睺羅の柵、阿難陀の柵、阿那調の柵、迦旃延の柵の8作品。
- (2) 1原図を14分割後、部分毎に拡大再構成し、下図原画を制作する。
- (3) 昭和16年作。著作権：財団法人棟方板画美術館所蔵(使用許可取得。平成21年11月26日付け。作品展示時、題名・所蔵美術館名を明示する)
- (4) 原画寸法：W165mm×H390mmを拡大し再現(印刷物

- (5) 下図寸法：A3
- (6) 製作拡大図実寸(天地なし)：W844mm×H2,079mm
- (7) 完成作品寸法(天地含む)：W840mm×H2,800mm(天地左右余白を含む)
- (8) 技法：ステンシル技法(型紙不使用。墨汁による叩きぼかし)
- (9) 表現素材：ロール和紙、自作スポンジブラシ、丸筆、墨汁、パレット その他。
- (10) グループ編成：5名×7グループ、4名×1グループ計39名
- (11) 制作期間：平成22年11月16日～平成23年2月15日。90分×8コマ=12時間

表1 授業概要と指導内容(平成22年度実施)

授業実施曜日・時限	授 業 概 要 と 指 導 内 容
第1回 平成22年12月7日(火) 5時限(90分)	課題設定理由、授業計画と作業工程、棟方志功の時代背景・作品について理解できるようにした。 1. 課題設定理由、制作目標、作業概要と工程表を、実物大作品(平成21年度完成作品)を提示し、課題のアウトラインを把握できるように指導。 2. 棟方志功と板画「二菩薩釈迦十大弟子」を、配布資料や画集 ²⁾ で解説。十大弟子について、そのエピソードを紹介。 3. 棟方志功の作品紹介と時代背景、作家の環境 ³⁾ 等を資料・映像により紹介し、課題への関心を深めさせる。
第2回 平成22年12月14日(火) 5時限(90分)	仏教と仏像(図像)、著作権、および文化財保護の現状について 1. 釈迦、如来、菩薩 ⁴⁾ 、仏像(図像) ⁵⁾ について配布資料により 仏像の基本について関心を深めさせる。 2. 著作権や知的財産保護について、本課題の作品使用許可書を提示し、知的財産の実態について学習。
第3回 平成22年12月21日(火) 5時限(90分)	チーム編成。前年度の完成作品をもとに、作品制作の手順や生活の基礎を解説後、制作を開始させた。 1. チーム編成の意図と意義について、平成21年度の例にもとに解説し、くじ引きによるチーム編成を実施。 2. チーム編成。自己紹介後、チームによる自主学習の基本とチームコミュニケーションの必要性について理解を深めさせた。 3. 図1・配布資料・原図を提示し、グリッドによる拡大法と座標点の取り方を板書により補足説明。 4. 生活の基礎知識として、紙の規格・√2矩形・図法・黄金分割・等分割法 ⁶⁾ 等について解説し、生活とJIS規格等について理解を深め、拡大の原理と方法を実生活に応用できるよう理解を深めさせた。 5. 作業手順や絵画の空間認識の基本事項を実例提示し、制作内容の確認と基本事項の共有の重要性を理解させる。 6. チーム内の担当画面の決定。画面の分割と拡大法および相似形の制作を解説。本時の制作目標を確認後、拡大作業を開始。机間巡回しチーム毎・個別毎指導を実施して、同一進度を保つよう留意させる。 7. 制作終了時の諸連絡(清掃・用具の整理等)と次時の予告。
第4回 平成23年1月11日(火) 5時限(90分)	前時の制作工程の確認と本時の制作内容を確認し、実制作を開始。 1. 机間巡回による拡大図制作の個別指導。班毎のチームコミュニケーションの実際を観察し個別に巡回指導。 2. 正確な作図が作品精度を高めることを理解させ、相互コミュニケーションを図り、個別の作業進度がチーム進度に同期させることを意識させて、作業するよう巡回指導。 3. 他チームとの進度および自主的活動について確認後、次時の予告。
第5回 平成23年1月17日(火) 5時限(90分)	拡大図の完成と制作下図の完成。自作教具の制作。ステンシルの技法修得とステンシルによる制作開始。 1. 各チーム14枚の拡大図を制作完成後、下図統合。接続部分の修正作業を実施させる。 2. 下図統合後は原図に基づき、ステンシル部分の明確化と誤作業防止のハッチング作業を行わせる。巡回指導。 3. 市販品による自作教具作成。使用素材は市販品を使用。創意工夫により自作させることで、体験を通して生活を再認識させることで、将来の生活のQOL向上の素地となるよう意識させる。 4. ステンシル技法と版画の再現性について、事前体験により作業効果を確認。その特徴と表現の可能性に着目させる。 5. ステンシルによる表現技法の修得と実生活へ活用できる応用例を紹介。 6. 本時の制作の進度とチームコミュニケーションの具体例を確認後、次時の予告。
第6回 平成23年1月25日(火) 5時限(90分)	自作教具によるステンシル技法により制作を実施。 1. 作業工程表の確認と制作ポイントを巡回指導。 2. 制作が計画的に進行できているかを巡回指導。各チームの進行が同期するよう指導。 3. 学生個人の授業参加状況を観察し授業記録の作成と評価。 4. 本時より授業終了後、制作途中の全チームの作品を展示。展示によりチーム毎の作品評価が得られることや他チームとの相互評価による自チームの修正点、チームコミュニケーションの実際と作品進度の確認の場とした。
第7回 平成23年2月8日(火) 5時限(90分)	ステンシル技法による制作。 1. 前時と同様の目標を巡回指導。多くの学生との接触により、表現意欲を引き出す指導。 2. 次時の予告と新聞取材について参加同意を確認。
第8回 平成23年2月15日(火) 5時限(90分)	作品完成。作品展示と鑑賞会実施。記念写真撮影。授業評価アンケート・自作アンケート用紙配付。 1. 作品完成。完成作品展示。記念写真を撮影。 2. 全作品展示。作品を前に制作途中のエピソードや達成感を発表させ、作品完成による成就感を共有できる場とした。 3. 作品展示は大学棟ロビーで実施。履修生以外の学生からも作品の評価を得られるよう配慮した。 4. 「美術と生活」独自のアンケート実施。履修学生の生の声を集約し次年度の授業計画の基礎資料とした。
平成23年2月15日(火) 6時限	授業終了後、新聞取材を大学ロビーにて受ける

3. 授業実践と予測

アート教育の共同制作では、造形活動と言語を介するコミュニケーションとの相乗効果により、相互理解と共感を深めて、授業をより効果的に演出できる面を有している。本課題ではアクティブ・ラーニングを導入したことにより、題材の取上げ方、授業形態、自作教具の開発、授業実践方法等、前例がないため、授業者は事前の実作品の制作を行い時間計測・技法の問題点や再現度等々、授業の導入段階から完成に至るまでの一連の作業の分析と工程の確認、授業効果について実証し、それにより、制作内容や留意点、教材や授業法等を盛り込んだ工程表を作成した。本研究の課題設定から完成までの一連の過程は、今までのアート教育であまり試みられない方法である。学生の各チームが課題の問題点を具体的に考察し、分析及び実施、次段階の予測と準備を共有し実践できるようにした。その結果、①各チームは、それぞれステンシル技法により、配布資料を約4倍に拡大し作品を完成させた。②等分割手法の共同制作は全履修生を満足させ、チームにおける個人の自主性と協調性を養うことができると考えられる。③美術の共同制作は各自がチームを運営する意義を自覚し、大きな成果を上げる可能性を教育できることが示唆され、看護や医療の現場において、必然的なチームコミュニケーション能力、治療者に対する的確な判断と冷静に対応できる能力を育成の一端を担うと考えられる。④美術は多くの基礎知識を積み上げることで成り立つことを理解し、将来の生活に役立つ能力を養うことが出来た。また、日常生活を支える基礎知識や表現の基本技法・道具の自作などが、将来の生活に活用できる能力や、将来の職場で自己と他と有機的な関係構築の重要性に気づかせることができたのも大きな成果である「美術と生活」全15回の中、前半部分では絵画の基礎知識や基本的表現技法、生活に関する基礎知識（JISと生活の関連、生活の中の単位）文化財愛護や著作権保護、作家を取り巻く時代背景、仏像の見方などの今後の生活に活用できる基礎技術等を毎授業時間前半部に折り込みつつ、後半実施の授業への導入とした。複数年度実施の授業実践のため、基本事項として①同一資料の使用で導入時指導。②グループ編成の趣旨と編成方法。③設定時間内での完成厳守。④制作手順や表現技法の統一。⑤毎時間の制作工程の確認。⑥工程表に応じてディスカッション、ワークシェア、コミュニケーションの実態把握。⑦制作は各グループで自主的に運営する。

実践の成果検証のために、平成21・22年度の授業終了時に、自記式の質問紙調査を実施した。調査には共同制作の目的の理解、生活を取り巻く規格や基本技術の習得、作家の周辺知識、作業の均一化と作業手順の相互確

認、コミュニケーション技術、文化財保護や著作権問題、課題完成後の満足度の12項目と及び高等学校の芸術の選択科目調査、授業全体の感想等を求めた。回答は2カ年間で97%であった。ほとんどの学生には、課題内容と課題の配列、制作手順が理解され、アクティブ・ラーニングの授業実践が支持されたことが示された。また、課題制作を通しての各グループのコミュニケーションが構築されたことが明確化できたことから、本共同制作による課題は学生から支持されたと考えている。

4. 授業展開について

授業展開並びに使用教材を実施順に以下のように配列し授業を実践した。

題材の棟方志功「二菩薩釈迦十大弟子」の全12図のうち、初年度の平成21年度はこの中の3図を制作し、次年度以降のペースメーカー的作品制作を目標にさせ、作品の完成度を高めるよう指導した。この3作品の完成度が、次年度の授業に大きく影響するからである。自分達の作品が、後輩達へのメッセージとして受け継がれることを強く意識させ、全12図の完成は3カ年計画であることを伝えた。

しかし、平成22年度は、選択生増加により、残部の8図を制作でき、「二菩薩釈迦十大弟子」図は全12作品がここに完成した。

IV. 研究方法

1. 調査方法

教養基礎科目「美術と生活」履修生に以下のアンケート用紙を配布し、課題終了時に協力を要請した。アンケート内容は、表2のように、本授業に対する評価を行ない、さらに授業に関する感想を自由記述とした。本授業の評価については、郷土作家の理解度、基礎技術等作品制作に関する事項、コミュニケーションに関する事項、達成度に関する自己評価に関する事項、学習全体に関する事項等詳しく12項目を設問した。なお、アンケート実施に際し本学の倫理的配慮に準じた。

2. 調査対象者

平成21年度「美術と生活」履修生21名。看護学科5名（女子4名、男子1名）。作業療法学専攻16名（女子9名、男子7名）。回答者19名。

平成22年度「美術と生活」履修生39名。看護学科12名（女子12名）。作業療法学専攻24名（女子20名、男子4名）。言語聴覚学専攻3（女子2名、男子1名）。回答者37名。

3. アンケート調査の配付、回収方法、調査年月日

授業開始時にアンケート実施を予告し、最終授業の終了時、平成21年度：平成22年2月15日。平成22年度：平成23年2月15日。アンケート用紙を配付し、各自で学務部の所定のボックスに提出。

表2 「美術と生活」授業に関するアンケート
平成21年度・平成22年度 回答率(%)

質問項目	① 棟方志功について興味を持った		② 制作手順について理解できた		③ 等分割の基礎が理解できた		④ ステンシルについて理解できた		⑤ 原図の拡大が上手くできた		⑥ ステンシルの表現が上手くできた		⑦ 他のコミュニケーションが上手くできた		⑧ 完成まで順調に進んだ		⑨ 共同制作に興味を持てたか		⑩ 自分の制作に満足できたか		⑪ 等分割の基礎を生活に応用できますか		⑫ 授業の課題数は適正でしたか	
	21	22	21	22	21	22	21	22	21	22	21	22	21	22	21	22	21	22	21	22	21	22	21	22
はい	31.6	45.7	100.0	89.0	94.7	75.6	84.2	81.0	84.2	83.7	73.7	70.2	73.7	81.0	89.5	86.4	73.7	72.9	73.7	64.8	52.6	59.4	89.4	64.8
まあまあ	52.6	50.1	0.0	11.0	5.3	24.4	15.8	19.0	5.3	26.3	26.3	29.8	26.3	10.5	13.6	27.1	26.3	35.2	42.1	40.6	42.1	40.6	10.5	35.2
いいえ	15.8	3.2	0.0	0.0	0.0	0.0	10.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	5.3	0.0	5.3	0.0	0.0

① あなたが、高校時代に選択した「芸術」科目は

年度	音楽	美術	書道
21	47.3	21.1	31.6
22	51.4	35.1	13.5

4. 分析方法

質問項目を、「はい」、「まあまあ」、「いいえ」の3段階で評価し、100分比で表記。

5. 倫理的配慮

アンケート調査は全選択生に、授業開始時に研究の概要、不利益の有無、個人情報保護等について口頭と書面にて説明し、無記名での参加を承諾後実施した。新聞取材には、報道範囲等の諸条項を説明後、自由参加の意思確認学生のみ取材を受けた。

V. 結果

授業へのアンケートの結果は表2に表記。平成21 / 平成22年度を並列表示した。

①使用原画に関する関心は、「いいえ」が15.8/3.2%で21年度は約6分の1と少なく、「はい」31.6/45.7%、「まあまあ」52.6/50.0%とほとんどの学生が関心を持った題材であった。アンケート設問の②～⑥の共同作業のための手順、等分割方法、ステンシル技法、拡大方法等、制作に関する基礎知識の理解度については、「はい」73.7%～100%、「まあまあ」が0.0%～29.8%であり、これらの

合計割合は、⑤の原図の「いいえ」は21年度の10.5%以外において、全て100%であった。④、⑥のステンシルに関して「まあまあ」がそれぞれ15.8/19.0%、26.3/29.8%であり、ステンシルに関しては、理解と実技においてやや問題があったことが示唆された。アンケート⑦～⑩の制作に関する到達度および心理的設問では、「はい」の割合は73.7%～89.5%で、前記アンケート同様に高い割合であった。他は、「まあまあ」のみで、「いいえ」が皆無であった。⑪の生活への応用では、それぞれ「はい」52.6/59.4%、「まあまあ」42.1/40.6%、及び「いいえ」5.3/0.0%であった。「はい」が半数以上であり、「まあまあ」も高く、前二者で21年度の1名を除いてほとんどの履修学生によって応用できると判断された。設問⑫の課題数の適正かを問う設問については、「はい」が89.4/64.8%であり、「まあまあ」が10.5/35.2%でほとんど問題なく行なわれたことが示され「いいえ」がひとりの5.3%であるが、⑪の「いいえ」と対照された。授業への感想を求めた自由記述は15/31名が応え、概略すると次のようであった。楽しかった、または面白かった7/13名。先生がやさしく、授業が好きになった2/6名。この他は多々難しい事もあったが、それなりに楽しくできた。難しいと聞いていたけれど、自分のペースにちょうど良く、とても楽しかったので、毎年やりたい。美術はあまり好きではなかったが、授業を受けて、少し興味をもてるようになった。皆が楽しくやれるのが良かった。いろいろと作るのが楽しかった。他の授業とちがって、いろいろと生活に生かせるものが多かった。などであった。美術について、今興味をもっている分野への自由記入では11/21名が応えた。版画、静物画、人物画、風景画と写真、ペーパークラフト、ステンシル・ちぎり絵、美術、などの他、片麻痺患者の利き手交換の作業で美術が行なえるかどうか、ステンシルの道具が簡単に作れることを知ったので、これからの生活に生かしたい。があった。また、授業内での調査で、高等学校での芸術科目の履修状況は音楽47.3/51.4%、美術は21.1/35.1%、書道31.6/13.5%、であり、平成21年度は美術の履修率は低く、ほとんどの学生が中学校の美術教育の段階で終了していることが判明した。しかし22年度は35.1%に向上したが、美術の履修率は高いとは言えない実態である。

VI. 考察

アートは自己の美に関する感性を表現する手段ではあるが、本授業研究のねらいは、学生にアート教育の楽しさを体験させ、将来の生活、とりわけ医療関係の職場への活用の可能性を検証しようとした。すなわち、本共同制作の授業が、異なる職種の医療技術者とのコミュニ

何を、何のために、どのように行なうかが理解され、その結果として、1グループ7/5～4人が各自の役割を自覚することで、ほとんど全員が満足できた作品を完成させたことが示された。一つの目標に対しチームで取組むためには、指導的立場の者はきめ細かにその対処について説明し、理解させることの重要なことが示唆されていると考えられた。共同制作は互いにコミュニケーションを図りながら、計画的に手順を決めて制作することが求められるが、これらのことを取りまとめるリーダーが自主的に選出されたことも好結果へ繋がっていると考えられる。また、全員が共同制作に興味を持ったことは、各自がチームの一員としての位置と役割を理解したことが示されており、チームを運営する意識を自覚したことが表明されている。

この課題の技術上の主点は、手作業で原画を400%に拡大することから始まり、完成下絵を基にステンシル技法で、版画のイメージを再現することにある。完成作品実寸がW840mmH2,800mm×の大型作品であり、下絵の作成は精緻さが要求される。粗雑な作業では各自の制作した拡大図を統合時に、誤差が生じるからである。学生には初めての体験であったが、完成作品への高い満足度からは、ステンシル技法の理解と実践が相互にコミュニケーションを図りながら、仲間の出来不出来を受け入れ、歩調を合わせて作業が進められ、チーム全体の流れを見ながら作品を完成させたことを表している。課題に配置された幾つかの教材を授業者がその制作手順等を実演し、指導したことも技法の基本が理解され、学生自身がより主体的に共同制作に参加でき、特に問題を招くことはなく、満足できた作品を完成させたと考えられた。履修生のほとんどは完成作品を前にして、満足できなかった学生は皆無であり、また、全員が本共同制作について興味をもったことが示されており、完成された作品への高い満足度がチームにおける個人の自主性とチームの協調性が養われた授業になったと考察された。

履修生の言動からは、制作された作品が学内外に展示できる完成度に達していると、みなされていることが伺われた。等分割等の手法を今後の生活への活用については、大部分の学生にとっては難しいことではなく、将来の職場や生活において、活用できる技術的能力を獲得としたと考察できた。また、将来自分の演出でこの手法を生かせる可能性が示唆された。作品は他者への公開で共感や批評等を経ることで、作品として認められることから、学生の労作を単に授業内での制作物としてではなく、学園の財産として考え、作品を公開することにした。その他、学習成果の結果として新聞社の取材を受

け、作品写真と学生のコメントが掲載された。その中に「共同制作で仲間が増えた。一つのものを作る素晴らしさを知った。」等のコメントがよせられていた。写真1に2カ年分を掲載した。

(受理日 2012年10月31日)

Ⅶ. 謝 辞

財団法人棟方板画美術館より教材の著作権使用を許可いただき、深謝いたします。

引用文献

- 1) 馬場一郎他：別冊太陽 棟方志功 SUMMER'74 P16-17 平凡社 1974
- 2) 柳宗悦：棟方志功板画 図版40-4 摩書房 1968
- 3) 馬場一郎他：別冊太陽 棟方志功 SUMMER'74 P44-85 平凡社 1974
- 4) 藪中五百樹他：歴史とのふれあい 仏像 鑑賞の手引 P10-42 株式会社フジタ 1990
- 5) 倉田文作：仏像のみかた〈技法と表現〉P52, P72-74 第一法規 1969
- 6) 田中正明他：デザイン技法講座 4 P33-36 美術出版社 1984

参考文献

- 青森県立郷土館：青森県近代日本画のあゆみ展 青森県郷土館 1998
- 青森県立郷土館：特別企画青森県近代洋画のあゆみ展 青森県博物館等協議会 1990
- 新川昭一：これからの美術の指導1 絵画・彫刻 明治図書 1988
- 高橋正人：構成 視覚造形の基礎2 鳳山社 1974
- 塚田敢他：デザイン教育体系第2巻 基礎デザイン 平面 誠信書房
- 堀 徳郎：青森県高等学校教育研究会 研究紀要 第13集 青森県高教研 1969
- 宮脇理監：新版美術教育の基礎知識、建帛社 1991
- 棟方志功記念館：ようこそ棟方志功記念館へ 棟方志功記念館 1975
- 文部科学省：高等学校学習指導要領解説 芸術（音楽 美術 工芸 書道）編 音楽編 美術編 第2節芸術科の目標 2009